

R18

嘘は吐けない

——男だけの快樂尋問デスゲーム——

体 験 版

1

第1話 緑のランプ

金属が鳴った。

正面に立っていた男の首が、前に落ちる。

黒い首輪が音もなく締まって、男はそのまま動かなくなった。

少し離れたところで、もうひとり同じように崩れる。

俺は壁まで下がった。

怖い。

夜勤明けの帰り道だった。

駅の階段を降りたところで、首の後ろに何か
がチクリと刺さった。

次に目を開けたら、この見知らぬ部屋にいた。

説明はひとつもない。

『参加者七番、八番、脱落』

天井のスピーカーが言った。

抑揚のない合成された女の声だ。

『残り六名。第一ラウンドを開始します』

床の線に沿って壁がせり上がる。

体育館ほどの広さがあった部屋が、細かく切り分けられていく。

気がついたときには、俺は四畳半ほどの箱のような空間に閉じ込められていた。

同じ箱に、もう一人いる。

俺より頭ひとつぶん高い男だった。

黒いシャツの袖をまくって壁にもたれている。

この状況で慌てている様子がない。

「日下部さん、ですね」

男が言った。

名乗った覚えはない。

「なんで俺の名前を……」

「そこに書いてありますよ」

男が自分の鎖骨のあたりを指すので、つられて胸元を見た。

シャツに縫い付けられた白い札に、日下部湊と印字されている。

「俺は伊丹といいます」

伊丹の札にも、伊丹とだけあった。

『ルールを説明します』

女の声が降ってくる。

『各参加者の首輪には、鍵となる言葉がひとつ登録されています』

『相手の鍵を言い当てた者が勝利。言い当てられた者は脱落します』

脱落という言葉で、さっきの男の首を思い出した。

『暴力は禁止です。殴る。首を絞める。刃物を使う。感知した時点で、やった側を脱落とします』

じゃあ、どうやって口を割らせるんだ。

『首輪には正直機能があります』

『装着者の心拍と体温が基準を超えている間、ランプが緑に変わります』

『緑の間、装着者は嘘を吐けません。吐いた場合は脱落です』

『制限時間は三十分。開始します』

ブザーが鳴った。

心拍と体温を上げるには、走らせて疲れさせるか、性的に興奮させるしかない。

この箱に走る場所はない。

答えはひとつだ。

俺が見ると、伊丹も俺を見ていた。

「先に言っとくぞ」

声が震えないように喋る。

「俺があんたの鍵を当てる。あんたには当てられない」

「……根拠は？」

「ない」

伊丹が少し笑った。

考えるより先に距離を詰めて、伊丹のベルトに指をかけた。

先に緑にした方が勝つ。

それだけは分かる。

「ずいぶん積極的です」

伊丹は動かないし、抵抗もしない。

ベルトを外して前を開けて、下着の上から手のひらを当てた。

熱い。

男のものに触るのは初めてだが、嫌だとは思わない。

今は生き死にの話だ。

ズボンの布越しに握って上下に動かした。

しゅ、しゅ、と乾いた音がする。

ズクリと脈打ちながら、手の中でどんどん硬く太く膨らんでいく。

伊丹の呼吸は変わらないし、腹の筋肉も動かない。

ズボン越しに握った手の中のものだけが、正直に反応していた。

伊丹の首輪のランプはまだ白い。

「呼吸が浅くなっていますよ」

伊丹が言った。

「自分の心配でもしてろ」

「していますよ」

「余裕ぶって……」

「余裕なんかじゃありません。どちらが先に緑になるかという、順番の話をしているんです」

意味が分からない。

下着をずらして外に引き出すと、出てきたそれは思っていたよりもずっと大きく反り返っていた。

はち切れそうな先端からは、すでに透明な液がとろりとあふれて光っている。

男の汗と、むわっと立ち上る雄の濃い匂いがして、首の後ろがカッと熱くなった。

指の腹で先をなでるとぬるりとした液が絡んだ。

ぬらぬらと糸を引いて、俺の指と伊丹の先端が卑猥につながる。

膝をついて、息を吸って、先端に唇をつけた。

塩の味がした。

ちゅばっ、と音を立ててしゃぶりつき、そのまま深く口の中にのみ込んだ。

歯を当てないように気をつけながら、舌を絡めて頭を前後に動かした。

上から落ちてくる息が、少しだけ乱れている。

いける。

そう思った瞬間、髪をつかまれた。

「日下部さん」

伊丹の声は低いまだ。

「そんな使い方だと、興奮してあなたのほう

が先にランプが緑になってしまいますよ」

引き上げられて、背中が壁に当たった。

伊丹の膝が俺の脚の間に入ってきて、逃げ場がない。

「離せよ……！」

「離しません」

ベルトを外されて手が入ってきた。

下着の中に大きな手が侵入し、無防備な肉を直接きつく握り込まれて、ビクッと腰が跳ねた。

「っ」

声を殺した。

自分でも気づかないうちに硬くなっていた。

「こんなに怖がっているのに、しっかり勃つ
んですね」

「うるさい、黙れ……！」

その手は乾いていて大きい。

全体を包んで、ゆっくり動かす。

しゅ、しゅ、しゅ

親指の腹で敏感な先端の割れ目をねっとりと
こすり上げられると、俺の先走り汁があふれて
指に絡みつき、水音が変わった。

ぬちゃ、ぬちゃ、ぐちゅり

「あ……」

出た声が、自分のものだと思えなかった。

視界の端で、俺の首輪のランプが白から緑に変わる。

「緑になりましたね」

伊丹が耳元で言った。

「質問します。あなたの鍵は、人の名前ですか」

答えたくない。

黙っていれば嘘にはならない。

奥歯を合わせて口を閉じる。

手の動きが速くなった。

しゅこ、しゅこ、しゅこ

ぎゅうっと強くしごき上げられ、あまりの気

持ちよさに腰が勝手に前に突き出てしまう。

「あ、あっ」

「人の名前ですか」

「言わ……ない……っ」

「なら、言わなくて結構です」

手が止まった。

絶頂のすぐ手前で焦らされて放り出され、下腹部に溜まった熱のせいで痛いくらいに疼いている。

「なんで……」

「ただ聞きたくなっただけですよ。あなたの声を」

伊丹の指が、ゆっくりとまた動きはじめる。

すり、すり

焦らされているのが分かって腹が立つ。

「ふざけんな……そんなやり方……」

「時間は三十分もあります。急ぐ理由なんて
ありませんから」

「もうひとつだけ。その名前の相手は、まだ
生きていますか？」

答えなければ嘘にはならない。

分かっているのに焦った。

「……答えなくていいです。顔に出ています
から」

「見るなよ……」

「見ますよ」

「じゃあ、あんたも答えろ……あんたの鍵は、
名前か？」

「はい」

伊丹の首輪を見た。

ランプは白いままだ。

緑でもないのに即答する意味が分からない。

「なんであっさり言うんだよ……」

「あなたが同じ質問に黙って答えたからです。

俺にとっては、それで充分でした」

首筋に息がかかって、伊丹の唇が耳の下に触

れた。

そのまま薄い皮膚を強く吸い上げられ、背筋
を甘い震えが突き抜けた。

「んっ……」

「ずいぶん感じやすいですね」

「黙れって……」

「ええ、黙りますよ。あなたが口を割ったら」
手が速くなる。

しゅこしゅこしゅこ

ぐちゅ、じゅるり、といやらしく濡れた音が
箱の中に響いた。

これが自分の出している音だとなると、恥ず

かしさで顔が熱くなる。

伊丹の親指が先端の割れ目をこすった。

びく、と腰が浮く。

「あ、あっ、そこ……」

「ここがいいんですか」

同じ場所を繰り返される。

逃げようとしても膝で押さえられて動けない。

下腹部に一気に快感が集まり、射精の波が押し寄せてくるのが分かった。

「出る、待って……っ」

「出していいですよ」

耳をなめられる。

それで決まった。

びくん、と腰が跳ねる。

どくっ、どくっ、と伊丹の手の中に濃い白濁
を勢いよく吐き出した。

ビュッビュッと何度も脈打って止まらない。

指の隙間から粘り気のある白い精液があふれ
て、伊丹の手首までどろりと垂れていく。

伊丹の腕がなければ、膝から崩れていた。

頭の中が白い。

その白さの中で、俺は言った。

「ハル……」

声に出したつもりはなかった。

伊丹の指が止まる。

「今、なんて言いました？」

息が上がって答えられない。

伊丹が俺の顎を持ち上げて、目が合った。

さっきまで落ち着いていた男の顔が変わって
いた。

「もう一度だけ」

「言わない……っ」

言った瞬間に殺される。

伊丹は俺の鍵を聞いた。

今ここで口にすれば、俺は死ぬ。

なのに伊丹は言わなかった。

代わりに、こう言った。

「日下部さん。それ……俺の鍵と同じですよ」

ブザーが鳴った。

『第一ラウンド終了。脱落者なし』

壁が下がり始める。

隣の箱から、シャツの前をはだけた男が出てきた。

目が合って、すぐ逸らされる。

誰も脱落していない。

六人が全員黙り通したということだ。

次のラウンドは、こうはいかない。

伊丹はまだ俺を見ていた。

体験版はここまで

これは、まだ入口です。

この先で、すべてが変わります。
選択も、関係も、そして――結果も。

知らないままで終わるか、
それとも、最後まで見届けるか。

答えは、本編にあります。

嘘は吐けない